

佳作

(兵庫県美方郡)

米田 雅代

「夫へ」

平成15年、あの日のマイアミも、今年の日本のように、暑かった。手続きのため、病院に入ろうとした時、あなたの足は、すくんだように止まった。そんなあなたに、私は、「いこうよ」と声をかけて、背中を押した。

一月十八日に渡米、半年近く待つてようやく得た脳死移植手術の日。なのに、不思議なほど、高揚感がなかった。まだ、半信半疑だったのか、それとも、心身ともに、限界をこえていたのだろうか。ありえないことが続いた。解決済の手術上のミスの指摘、またかよ、明らかに、あなたはいらだっていた。搬送の人の手違いから、私たちは、最後の手術室への見送りが出来なかった。「一人ではないよ。私たちも一緒にたたかっているんだよ。必ず、必ず、かえってきてよ」伝えることの出来なかった想い。手術中、どんなに心細かったことだろう。つらかったことか……でも、信じていたよ。手術が終れば、全て笑い話になる。

“すぐに来て”ドクターの電話。病院に迎うタクシーの中で、「時間がかかるほど成功です。心配しないで」というドクターの言葉を思いかえしていた。

一体、何が起ったのか?「思わぬ大量出血で、心臓が何度もとまって、どうしますか?」「もう、いいです、もう、十分です。」「何を言っているんだろう。(心の中では、何とかしてよ、助けてよ。嘘つき、大丈夫、まかせてと言っていたのに、と叫んでいるのに)どうして、そんな言葉がでてくるの……?」

「わかりました。準備をします」そう言って、ドクターは部屋を出ていった。

ふるえがとまらなかった。あなたが独力で、もう一度心臓を動かしてくれたことをあとで聞いた。あなたは最後まで、闘ってくれていたんだね。

“生きよう”と“生きるんだ”と。

人は、あなたの死をもって、失敗というかもしれない。私も、どうして最悪の時に手術を受けさせたんだとずっと後悔していた。でも、この手紙を書きながら、あなたの穏やかな最期の顔を思い出しながら、ようやく、わかった。あなたは、最後まで “生きよう” と挑み続けたことに満足しているんだ。確かに最後は力尽きたかもしれない、それでも、決して、無念の死ではなかった。

“おつかれさまでした。”でも、でも、もう一度、あなたと話がしたいです。

雅代